

『ハード・タイムズ』論 - - 翻弄される男たち - -

田中孝信

1. 序論 - 男性/理性対女性/感性

「事実」対「空想」という概念が『ハード・タイムズ』(*Hard Times*, 1854)の根幹を成しているのは、読めば一目瞭然である。この対立は同時に、「理性」対「感性」、すなわち、「男性」対「女性」の対立ともなる。ジェンダーの境界線に着目するデイヴィッド・ロウザンも指摘しているように、ディケンズの意図は、作品のそうした硬直した構図を通して、「慈悲深い公的政策、すなわち男性性と女性性、頭と心が融合する政策が、人間にとっていつも辛く、不安定で、しばしば悲惨でさえある世界を和らげるのに大いに役立つだろうとまさに示唆する」ことなのである。

¹ その姿勢の根底には、『家庭の言葉』誌創刊号(1850年3月30日)の序文に述べられているように、人間の心には、女性のみならず男性にも、生まれつき「空想」の光が備わっているという信念があるように思える。そのように考えてくると、『ハード・タイムズ』では実は男性自身が、表面上の一元化志向とは裏腹に、「健全なサーカスのイメージのグロテスクに歪んだ突然変異体」バウンダビーのように、² 本来併せ持つ空想/感性をイデオロギーやエトスによって歪められ抑圧された欲求として抱え込み、逆説的に自らの基盤を揺り動かしているのではないだろうか。本論では、そうした社会の実体を浮き彫りにし、異質な要素を孕む空間が、ペグラー夫人やブラックプール夫人といった社会の外に追放された女性からの攻撃にいかにも晒されやすく、不安定さを増しているかを明らかにしてゆきたい。

2. 男性支配のための政治学

父性/男性性によって成り立つ社会はその一元性を保持するために母性の抹殺という手段を取る。グランドグランド夫人の母としての役割は否定され、ルイーザやトムはグランドグランドが作り出したものとして定義される。またバウンダビーは、サリー・シャトルワースが「女性の働きをイデオロギー上永遠に消し去る表現」と指摘する、³ 中産階級男性の唱える「セルフメイド・マン」神話に自らを合致させるために、母親を目の前から追放するのみか、

立身出世のフィクションの中で彼女を悪い女に仕立て上げ、母から生まれてきた事実を否定する。彼のフィクションから彼の思考を辿れば、「自力で叩き上げた人間」“ a self-made man”である彼はどぶで大きくなった、それどころか、「どぶで生ま

れた」(17)。⁴ どぶは泥と水から成る。従って、彼は泥と水から自然発生的に作られたのであつて、母から生まれたのではない、ということになる。彼は自らの存在を換喩的に捉えながら、元来象徴的意味を持つべき投影物そのものになってしまうのである。自分が生まれる前に亡くなっていた祖母までをも「ひどくたちの悪い、最悪の老婆」(18)に仕立て上げ、母系制を棄却しようとする。事実偏重主義教育の申し子たるピッツァーの場合、母性の否定はさらに徹底しており、母親は救貧院に閉じ込められる。バウンダビーもピッツァーも一種の「母親殺し」を行い、それによって家族の存在そのものを否定しているのである。こうした母性の否定は、サーカスの世界と著しい対照を成す。そこに属する人々は、言わば、一つの大家族を形成しており、結婚もその集団の中で行われる。かつてキュービッドを演じ、「見物客の中にいる母親たち」(28)に絶大な人気を博していたキダーミンスターは、母親と言ってもおかしくないほど年齢の開きのある未亡人と結婚する。このとき同族結婚は、母と息子の近親相姦の様相すら帯びるのである。それは、自己と他者が分離する以前の母=子共生状態への回帰と解釈できる。我々は、その母子融合状態にそれと相同の体験である恋愛を見て、母性の役割を否定するほどに苛酷な父権的象徴秩序にあって、主体と対象の間の心理的、身体的境界の消滅がいかに大切かを理解する。

母性の否定は、それが有する女性的なものの排除ともなる。バウンダビーは「空想」から「母親」に至る、男らしくないと彼が判断するあらゆるものと戦う圧制者なのである。それらが排除された空間では、全ての行為の責任は男性にあるとされ、女性は男性にとって市場価値を帯びた商品でしかない。グラッドグランドが夫人を妻に選んだ理由の一つは多額の持参金だったし、トムは、弟を唯一の生きる縁とする姉がバウンダビーとの結婚で示す自己犠牲を、男である自分が受ける当然の権利だとしか見なさない。彼は、彼女個人の心の内を理解しようとはせず、女は男よりもうまく物事に対処できると一言で片付けてしまう：“‘...a girl comes out of it

better than a boy does"(43); " " A girl can get on anywhere"(103). このとき女性という性的他者に対する見方は一様化され、個性は無視されていると言えよう。そうした画一化は、男性 /理性対女性/感性という枠組みの中で、女性は感情的な生き物であるという暗黙の前提を生み出す。従って、グラッドグラインドがバウンダビーの結婚申し込みをルイーザに伝えたときの彼女の落ち着いた態度や、バウンダビーがスパーシット夫人にルイーザとの結婚を伝えたときの彼女の超然とした様子は、逆に男性を当惑させる。このように、いくら自分たちのイデオロギーに当てはめて処理しようとしても、未知であり不安にさせる女性を無性化し、自分たちに分かりやすく御しやすい存在にするための手段が、事実偏重主義教育なのである。それによって、ジェンダーの二分化という枠組みの中で、男性による女性支配が可能となるのである。

こうした社会をディケンズは狂気の世界として描き出す。理性を標榜し、自分たちの論理で物事を推し進め、自分たちの言語しか認めず、それへの絶対的服従を強要する姿勢に、偏執狂者の姿を見いだしているのである。それを反映して、空想を排除した産業主義論理そのものであるコークタウンは、「絶え間ない蛇のような」煙や「狂った象が憂鬱げに頭を振るように、単調に上下に動く蒸気エンジンのピストンといった比喻表現、さらには黒い運河や紫色に染まった川といった描写と相俟って、「色を塗り立てられた野蛮人の顔」(22)に変化する。ディケンズは擬人化された町の描写を通して、極端なまでの一貫性や正確さに理性 /文化とは程遠い狂気を見ているのである。住人バウンダビーの論理はそうした狂気の端的な例と言えよう。彼の厳密な論理的解釈によれば、彼は「自力で叩き上げた人間」だ、従って、家族を持っていようはずがないのである。彼はこの自閉症的妄想を、他人にまで適用する。手でもって働く労働者は「手」" the Hands"(52)であり、それ以外のものとして扱えば、論理に矛盾を来すことになる。足でも与えようものなら、「六頭立ての馬車に収ま」りたがるし、口を与えれば、「海亀のスープや鹿肉を、それも金のスプーンで、食べ」(57)れるのではと期待させることになる。ゆえに、彼らは「手」でなければならないのである。

しかし、これら男性自身が内に、理性とは相容れない無秩序な欲求を潜め持ち、抑圧しているのである。それが時として女性との係わりの中で、表面に噴出して来る。バウンダビーが娘

ほども年の違うルイーザに結婚を申し込むのは、彼女が教育によって無性化されたからではなく、彼女の中に女性特有の性的魅力を見いだしたからに他ならない。トムのことを話しているときでも、心はルイーザのことで占められており、言語と内面は一致していない：“He spoke of young Thomas, but he looked at Louisa”(19). 「『これだけのことをしてあげたんだから、一回ぐらいキスをしてもいいじゃろうな?』」(21)と言うとき、彼は言葉のうえでは、父親の怒りを抑えた代償として「金銭取引関係」に基づきキスさせるよう要求するわけだが、内面ではキスもたらさず性的満足感を求めているのである。スパーシット夫人との関係にしても、彼は彼女が自分の妻になりたがっていることに気づいており、これは明らかに彼の性的虚栄心を膨らませる。こうした彼の性的欲求不満を反映するかのごとくに、彼の頭はグロテスクに誇張され、今にも爆発せんとする「風船玉」(17)に譬えられる。爆発し頭を失った後に残るのは、産業主義や宗教の制御が効かない、理性には程遠いリビドーの世界なのである。ディケンズはバウンダビーが性的欲求を潜め持つことを示唆するために、彼の誇示する「セルフ・ヘルプ」像とは全く相容れない官能的な「東洋のダンサー」(139)に彼を譬える。このイメージはさらに、彼をサーカスと結び付ける。空想の象徴であるサーカスは、服もろくすっぽまとわず、足も露な人々からなる官能性を帯びた空間である。グランドグランドが空想を徹底的に排除しようとするのは、セクシュアリティをそこに見ているからである。トムの場合は、父親の教育によって空想とのあらゆる接触が禁じられたために、莫大な財産を自由にできる女性になら喜んで我が身を売ろうとする反面、感情面でいびつな成長を遂げ、肉欲にふけるという極端な結果を生じる。勤勉、実直、克己、誠実、服従といったヴィクトリア朝家父長制中産階級が標榜する徳を備えた労働者スティーヴンにしても、性的欲求は抑え切れない。労働者階級に属しはするが、男性という点で彼もまた画一化されたコークタウンという空間の構成員であり、「機械の停止がいつも生み出すあの奇妙な感じ - - 自分の頭の中で動いていた機械が停止したという感じ」(52)から逃れられない。そして、仲間の男性たちから追放された後の孤独におののく。しかしながらその一方で、レイチェルとの肉体的結び付きという、社会の規範から逸脱した行為を強く希求する。もちろんディケンズは彼女にも中産階級男性の欲望の投影と言える価値を付与し、「天使」

“Angel”(70)として描き出しているのだが、スティーヴンの見る夢が彼女への性的欲求を表しているのは明らかである。それは同時に妻に対する殺人衝動をも含む暴力的なものなのである。そこからは、自分たち労働者の利益と雇用者の利益とが一致すると思い間違いながら、支配者側の温情主義の必要性を雇用者、ひいては読者に訴えるスティーヴン像とは全く異なる一人の個性を持った人間としての姿が浮かび上がって来る。理性による一元化を成し遂げようとしている社会は、実際には、「理性」という仮面の下で、抑圧され歪められた空想 / 感性が性的欲求となって蠢いているのである。

3. 女たちの反乱

女性は男性の欲求を触発し理性による一元化社会を不安定なものにするのみならず、そのイデオロギーの実現を阻む。それは、グラッドグランド夫人、スパーシット夫人、ルイーザといった内に取り込まれた女性より遥かに効果的に、⁵ 男性中心社会にその存在価値を認められない女性たちによってなされる。バウンダビーが「彼の人生の事実」(18)から成る己が立身出世物語の正統性を主張するためにいくら母親を悪い女に仕立て上げ、母性の価値を否定しようとも、大団円で彼女の出現はその虚構を一挙に崩し去る。このとき、社会の作り上げた「セルフ・ヘルプ」成立の要因である母性の排除が実際には不可能であることが示される。そればかりか、ペグラー夫人の登場と、知らず知らずのうちに息子を非難するその口調は、まるで「母親殺し」に復讐するかのように、彼を衆人環視の中で去勢してしまう。「彼の態度には、怒鳴り散らしながらも臆するところがあって、そのためまったく意気が揚がらず、この上なく馬鹿げて見えた。……さすがの威張り屋も、たとえ両耳を切り取られてもこれ以上ではないと思われるほど、がっかり惨めな姿を見せていた」(194)という描写が、これまでの膨れ上がったイメージと何という対照を成すことか。彼女が彼のエゴイズムをしぼませたこの時点はフィクションに対する現実の勝利であり、それは同時に、母性の否定に基づく男性社会の資本主義的商品生産や、バウンダビーの遺書に見られるバウンダビーもどきの増殖に対して、母性による生殖が勝利を収める瞬間でもある。

スティーヴンの妻による社会への攻撃はさらに激しさを増す。この名も与えられていない女

性 “ [t]he evil spirit of his life”(117)は、一つにはスティーヴンの抑圧された情欲の反映と解釈できよう。社会の制約の中で歪められてしまった彼の感情が、形を取ってその醜い姿を現したと考えられる。従って名の付けようがないのである。しかし同時に彼女は、19世紀中期の中産階級男性が理想とし、次第に労働者階級の男性に、少なくとも熟練労働者に一つの理想像として広まって行った、秩序と平安から成る家庭空間の成立を阻む役割をも担っている。スティーヴンが夢見るのは、世間での荒仕事に疲れて帰って来る彼を暖かく迎えてくれる清潔な炉辺である。それは、妻が決して与えてくれることのない、貞淑な「天使」レイチェルの統治によって初めて可能となるものなのである。しかし、彼のそうした願いを嘲笑うかのごとくに、ブラックプール夫人は、家庭に閉じ込められることもなく、また外界に永久に追放されることもなく、自らの意志で両空間を不断に、それも何の前触れもなく行き来する。彼は、妻が戻って来るたびに金を払って追い出そうと試みるが、この金銭取引という社会が最も重視する手段によっても、彼女を「追っ払」(59)うことはできない。バウンダビーが毎年の送金と引き換えに母親に沈黙を強いても、母親を排除できないのと同じと言えよう。人格高潔で自己犠牲心に富むペグラー夫人の存在によってバウンダビーの自伝が拠り所とする「セルフ・ヘルプ」神話が覆されたように、この人格高潔とは程遠い、酒に溺れ不倫を犯した女性の存在によって、スティーヴンはレイチェルとの幸福な家庭の構築という夢を打ち碎かれるのである。スティーヴンの理想の家庭像は、バウンダビーの「セルフメイド・マン」像とは、後者が家庭の否定の上に成り立つものであるがゆえに、対立するわけだが、バウンダビー同様スティーヴンもまた女性の侵入によってその中産階級神話を実現できないのである。

それどころか、第1部第10章最後の寝室の場面からは、夫と妻の立場の逆転が読み取れる。彼女の前ではスティーヴンの方がまるで妻であるかのような姿を晒す。彼女は、突然現れては彼の全財産を売り払い、せつかく彼が築き上げてきた快適な空間を破壊する。比喩的な意味での夫へのレイプと言えよう。これは何も金銭面に限ったことではない。性的にも彼女は彼を支配している。「『ベッドからどいとくれ!』」(55)と言われて、身震いしながら部屋の反対側の端まで身を移す彼の受動性とは逆に、そこには攻撃的な女性のセクシュアリティが見られる。

ベグラー夫人のバウンダビーの食堂への出現が男性の生産に対する女性の生殖能力の主張であったように、ここでは、「家庭の天使」像と真っ向から対立する女性の官能性が強調される。確かに中産階級女性ルイーザは、ハートハウスに誘惑されながらも父のもとに帰ることで、「転落の女」となる一歩手前で踏み止まり、その後は幽閉された尼僧のような生活を余儀なくされる。少年期の靴墨工場での屈辱的な体験以来、中産階級への帰属意識に取り付かれたディケンズは、最終的には、父権制の道德律に則り、彼女のセクシュアリティを封印してしまうのである。だが、それを補って余りあるほどに、労働者階級の売春婦同然のブラックプール夫人は、肉体の持つ力を全面に押し出して来るのだ。グザヴィエール・ゴージェは、男性によって規定される「魔女」の要素として、踊り、歌、生命力、恍惚感を挙げているが、⁶ このようにセクシュアリティを発散するのみならず、わめき、這い回り、物語から生きたままさまよい出れば最後に再び現れるほどに強い生命力を帯びたブラックプール夫人は、まさに男性中心社会の秩序を乱す「魔女」なのである。

ブラックプール夫人に対するディケンズの態度には曖昧な部分がある。もちろん一義的には彼女は、我々の同情を得るべきスティーヴンを不幸に陥れる忌むべき存在として描かれている。飲酒癖と不倫ゆえの梅毒にかかった彼女の肉体的墮落を通して、内面の道徳的腐敗が表現される。そうすることで、非の打ちどころのない徳を備えたスティーヴンの離婚の訴えを正当なものとし、理不尽な性的他者の攻撃に翻弄され、救いを求めた法と社会からも見捨てられた彼の悲劇的運命を読者に提示するのである。この二人の関係は、バウンダビーとルイーザとの夫婦関係ともつながり、結婚という個人の密接な結び付きであるべきものが、人間味のない社会の圧力の犠牲となっていることが示される。だが、ブラックプール夫妻については、それだけでは納得しがたい面がある。中産階級が求める労働者像を体現したスティーヴンが中産階級の犠牲となって惨めな死を迎えるのに対して、ブラックプール夫人の方は、「妻の姿をした悪魔」に取って代わられた「死んだも同然の女」(65)として侮蔑的に描かれながらも、作品の最後まで生き残る。そこには墮落した女性にもたらされる必然的な死といった図式はない。これはどのように解釈すればよいのだろうか。単にスティーヴンのレイチェルとの再婚を執拗に妨げ、彼の

悲劇性を増す役割を担っているだけなのだろうか。結婚するまでは彼女も、他の女工たちと何ら変わらなかったのである。彼自身、結婚前の彼女がかわいらしく、評判も良かったと認めている。ところが結婚後、彼女は酒に溺れ始める。何が彼女を「自堕落な、誰からも見捨てられた女」「the self-made outcast”(66)にしたのか。結婚制度そのものなのか。果たして、「『俺があいつに優しくなかったなんてことのねえのは神様もご存じだ』」、「『俺は我慢しとりました』」(58)と、積極的とは言いがたい表現を使って己の正当性を主張するスティーヴンに、妻の堕落の責任はまったくなかったのだろうか。我々が思っている以上に、スティーヴンは複雑で汚れた部分を持っており、彼女の方もそれほど単純な人物ではなく簡単に悪人とは決めてかかれられないのである。飲酒癖一つ取り上げても、ディケンズは彼女を非難しているとは言い切れない。確かに、ジョン・D・ベアードも指摘するように、⁷ 内面の堕落をひどい飲酒癖で表すというのは中産階級小説ではよく見られる手段ではあるが、彼の場合、『イグザミネー』誌に寄稿した「クルクシャンクの『飲んだくれの子供たち』」(1848年7月8日号)でのクルクシャンク批判でも明らかなように、飲酒を一方的に飲み手の責任とは見なさず、それに追いやる支配者側にも責任があるとしているのは注目に値する。従ってブラックプール夫人は、社会の犠牲者としての側面をも有していると考えられる。“self-made man”神話の唯我独尊性を暴くディケンズは、彼女を表すにも“self-made”を用いて彼女に“self-made outcast”のレッテルを貼る。このとき彼は、汚穢を自分たちとは全く無関係なものとして排除する社会の姿勢に、アイロニカルに疑問を投げかけているのである。彼は彼女を家庭を破壊する自堕落な女として描く一方で、彼女を結末で再び導入し、その姿を公衆に晒すことで、社会が自らの責任を逃れるために排除しようとしてもしきれない、異質なものの存在を読者の意識に突きつけるのである。

以上見てきたように、理性による一元支配はそれ自体狂気の側面を帯びているのみならず、その構成員たる男性自身の中に抑圧され今にも爆発せんとする欲求が蠢いているのである。そうした二重構造を持つ社会は実は、自分たちが排斥したはずの人々から成る外部からの攻撃に晒されやすい。内部に取り込まれながらも反抗の姿勢を示す女性より遥かに強烈な形で、完全に異質なものとして排除された女性は社会に侵入して来る。このように考えれば、この作品に

は、抵抗する女性が満ち溢れている。シシー、ルイーザ、グランドグランド夫人、スパーク夫人、ペグラー夫人、ブラックプール夫人、レイチェル、こういった女性たちは、程度の差こそあれ、何らかの形で、彼女たちが生きている、産業・教育・家庭を支配する家父長制システムの根底を揺さぶり侵食しているのである。男性原理が猛威を振るう中でも、決して沈黙してはいないのである。ブラックプール夫人の肉体性のみならず、スティーヴンに仲間の労働者を捨てさせるレイチェルの超俗性もまたそうだとと言える。「『あたしはこの人に、どうか自分自身のためにも面倒事を避けるようになって頼んだんです。あたしのためにこんなことになるなんて少しも考えずに』」(120)と、ルイーザに涙ながらに告白しているように、気まぐれから彼女はスティーヴンに組合に入らないようにと頼む。彼女を「『俺の人生の守り神』」(120)として崇める彼は、彼女の言うことは何でも厳粛に受け止める。その約束を忠実に守ろうとした結果、彼は雇い主バウンダビーからのみならず、労働者仲間からも見捨てられ、拳銃の果てに、人生で何らの幸せも味わうことなく、銀行泥棒の嫌疑が掛かったまま、「古い地獄坑」で命を落とす。そう考えると、彼女を単に中産階級の価値観の体現者とするだけでは割り切れない側面がある。二人の女性とも彼との関係で定義されているわけだが、もし彼女たちが手稿を書けば、さぞや興味深い物語を提供してくれたことだろう。しかしながら、飲酒、性的悲惨さ、資本主義的搾取といった要素がここには複雑に絡み合っており、かえって二人の描写の曖昧さが、これらの問題を分析させるより感じさせるのに貢献している。こうした女性たちを一面的に捉えるのは不可能であるにもかかわらず、男性中心社会は自らの権力を保持するために、彼女たちを「魔女」として抑圧・排除するか、さもなくば、「天使」として内に取り込み束縛してしまわねばならない。「魔女」が邪悪に見えるのは、彼女が社会にとって真に危険な力を帯びているからなのである。そこには社会が無意識のうちにも女性に対して抱く恐怖が読み取れる。

4. 結論 - 混沌への誘い

ディケンズ自身、幾人かの女性を男性よりも極端なまでに道徳性に長けた人物として描いている点で、女性を「魔女」と「天使」の両極端に分類する男性主導の中産階級言語に囚われているのは否定できない。のみならず、そうした理想化された女性の性質として同情心、空想を挙げ

ている点にも問題がある。彼は、これらの女性性を近代的資本主義産業システムの根底に横たわる合理性や事実といった支配的な男性性と対立させ、社会はある程度「女性化」されなければ崩壊し続けるだろうと、作品の中で主張しているわけである。だが、この一見急進的に思える洞察自体、シシーの例にはなはだしきように、空想を専ら女性登場人物に割り振っている点で、彼が、女性を社会的というよりは「自然な」存在とする性差別主義者の固定観念から完全には抜け出せていないことを証明している。従って、『ハード・タイムズ』は男性の合理性およびそれによる社会支配を批判している点で「女性的」小説と言えるわけだが、その一方で、家父長制に代わり得るものを担う女性たちは、依然として家父長制の用語で捉えられていると解釈できる。結局は、家父長制の存続を前提としたうえで、その枠組みの中で強者たる男性がどうあるべきかを訴えているのだと言えよう。逆に女性の中の理性/男性性が顧みられていないことも、『ハード・タイムズ』の問題点だ。性に基づく二分法的な定義は男性自身の表現を厳しく制限してしまっているとして、男性の抑え持つ感性/女性性が示唆されるに止まっているのである。また、社会的に従属的地位に置かれた女性たちが男性をどのように見ているかにまで彼が思い至っていないのも事実である。

しかし、それらは現代という視点から眺めた場合に生じる問題である。我々は、家父長制中産階級社会という中心世界に属するディケンズが、父性/男性性と母性/女性性の対立という当時の支配的イデオロギーに孕まれた問題を取り上げた点に注目すべきだ。一見したところ堅固な二項対立構図の中で、常に中心と周縁との緊張関係に目を向け、中心世界の異質性を暴くのみか、境界侵犯による流動性をも描き込んでいる点は特筆に値する。従来の「理性」対「感性」といった表面上の分け方では捉え切れない、ジェンダーの問題が内包する混沌・カーニバル性を、ディケンズは作品の短さゆえに可能とも言える一貫性をもって読者に示しているのである。

その背景には、当時次第に盛り上がりを見せた女性解放運動がある。いくらセアラ・ルイス、エリス夫人、それにラスキンらが良妻賢母のイデオロギーを中産階級女性の精神に刷り込もうとしても、例えばアメリカのブルーマリズムに触発されたイギリスの女性たちは社会進出を図る。団結した女性は男性の敵となる：“ If they[women] could but unite their forces, earth's whole

dynasty would be changed, and woman would become the mistress of the creation."⁸ 『マーティン・チャズルウィット』(1843-44)で男根を象徴するキュウリを貪り食うギャンブ夫人とブリッグ夫人を滑稽に描いたディケンズは、50年代に入ると、『荒涼館』(1852-53)で家庭を顧みず慈善活動にうつつを抜かずジェリビー夫人やパーディグル夫人を揶揄する一方で、エスターを含めた全ての女性が潜め持つ、男性の制御の効かないエネルギーを示唆していた。その流れが『ハード・タイムズ』にも受け継がれているのである。社会の犠牲となる女性に憐憫の情を抱きながらもディケンズは、女性の潜勢力がどれほどの脅威であるかを認識していたのである。単に、男性が女性的要素を持つことの重要性を訴えるといった生易しいものではないのである。女性の力は、『リトル・ドリット』(1855-57)のウェイド嬢とタティーコーラム、『大いなる遺産』(1860-61)のハヴィシャム嬢とエステラといったふうに、作品を追うごとに表面化する。そこには、ディケンズの恐怖心だけでなく、マゾヒスティックな共感も描き込まれ、男性権力の弱体化が露呈する。そうした事態を引き起こした女性に対する力による矯正、父権制の再構築が作品の大きなテーマとなる。それはディケンズ自身の内面の葛藤を表現したものと言えよう。彼のこうした反応と符合するかのよう、60年代にはセンセーション小説が大流行する一方で、64年には、女性のセクシュアリティを統御し、男性の弱体化を防ぐ一つの試みとして、売春婦取り締まりのための「伝染病法」が成立するのである。

注

1. David Rosen, *The Changing Fictions of Masculinity*(Urbana and Chicago: U of Illinois P, 1993) 172.
2. Paul Schlicke, *Dickens and Popular Entertainment*(London: Unwin Hyman, 1985) 177.
3. Sally Shuttleworth, "Female Circulation: Medical Discourse and Popular Advertising in the Mid-Victorian Era," *Body/Politics: Women and the Discourses of Science*, ed. Mary Jacobus, Evelyn Fox Keller, and Sally Shuttleworth(New York and London: Routledge, 1990) 51-52.
4. テキストは Charles Dickens, *Hard Times*, ed. George Ford and Sylvère Monod, 2nd ed.(New York: Norton, 1990)を使用。括弧に入れて頁数を示す。

5. 彼女たちによる一元支配への揺さぶりについては、拙論「*Hard Times* 論-揺らぐ一元支配-」『人文研究』大阪市立大学文学部紀要、第45巻第4分冊(1993)、45-58を参照のこと。

6. Xavière Gauthier, "Why Witches?" *New French Feminisms*, ed. Elaine Marks and Isabella de Courtivron (Amherst: U of Massachusetts, 1980) 199-203.

7. John D. Baird, "'Divorce and Matrimonial Causes': An Aspect of 'Hard Times,'" *Victorian Studies* 20(1977): 408.

8. George Whyte-Melville, "Strong-Minded Women," *Fraser's Magazine* 68(1863): 668.

大阪市立大学

出典：『英語英文學研究』第45巻（広島大学英文学会，2000）57-68。

A Study of *Hard Times*--Men at the Mercy of Women--

Takanobu Tanaka

The keynote of *Hard Times*(1854) is a conflict between Fact and Fancy. This conflict is also that between reason/man and emotion/woman. Dickens insists men should be feminized to some extent for the construction of a wholesome society, and regards the rigid dichotomy as unjust. At the basis of his attitude lies the conviction that men are also emotional/feminine by nature. Therefore in *Hard Times* men conceal fancy in the form of suppressed and distorted desire while they apparently aspire to unify their world by reason. In this paper, we bring into relief the heterogeneity involved in society, and make it clear that society is easily exposed to the attack of such exiled women as Mrs. Pegler and Mrs. Blackpool and therefore becomes unstable.

A society based upon paternity/masculinity contrives a kind of matricide in order to maintain its unity. A denial of maternity is also a denial of femininity it bears. Dickens regards as quite mad a society which applies its own ideology to Others in gender and class and obstinately claims to stand for reason.

But men themselves keep in secret the chaotic desire that is incompatible with reason. It sometimes bursts forth to the surface in relation to women. Suppressed and perverted fancy/emotion wriggles in the form of sexual desire.

Women do not only make the unified society unstable by detonating men's suppressed desire, but also hinder the realization of its ideology. Even though Bounderby denies the maternal value to realize the myth of a "self-made man," Mrs. Pegler's appearance in the denouement discloses its falsehood and castrates him. Mrs. Blackpool plays the role of obstructing the formation of an ideal domestic space for the middle-class men. As female reproductive power is asserted through Mrs. Pegler, so is aggressive female sexuality asserted through Mrs. Blackpool.

Dickens's attitude toward Mrs. Blackpool is somewhat ambiguous. Principally she is portrayed as an abominable woman who plunges the good Stephen, a worker embodying middle-class virtues, into unhappiness. But we should notice that it is after marriage that she began to fall away. Does Stephen have no responsibility for his wife's fall? She can be judged another victim of patriarchy.

This novel is filled with women undermining the paternalistic system. The spirituality of Rachael can also be a threat to society when we find her caprice the cause of Stephen's desertion of his coworkers. Men must both exclude some women as "witches" and take in other women as "angels" to constrain them, so that they can retain their vested rights. Underneath it there is men's unconscious fear of women.

It cannot be denied that Dickens himself is caught up in the language which classifies women into two extreme categories, a "witch" and an "angel." Furthermore, his mention of sympathy and fancy as an idealized woman's qualities is also problematic. Another problem is that women's reason/masculinity is unheeded. It is also true that Dickens does not seek to discern what view women, the subjugated gender, form of men.

But these are problems arising when we read the novel from the present-day viewpoint. We should note that Dickens, a member of the patriarchal society, takes up the problem involved in the then

dominant ideology of paternity/masculinity vs. maternity/femininity. He shows readers the chaotic and carnivalesque qualities lurking under the surface division, and does so with a consistency only possible due to the compactness of the novel.

At its background, we can see the development of the nineteenth-century British women's movement. Dickens himself often draws the women of transgressive power especially after *Martin Chuzzlewit* (1843-44). That tendency comes down to *Hard Times*. It is true that he sympathizes with women as victims of society, but he also recognizes their potentiality constitutes a threat to patriarchy. His insistence is not so simple as that men should be feminized to some extent. Female power gradually comes to the fore in his later works. There, not only his fear of but also his masochistic sympathy with women is depicted, and the weakening of male power is revealed. The reconstruction of patriarchy by correcting women by force becomes one of the main themes of those works. In accordance with such a response of his, while sensation novels were very popular in the 60s, the first brutal Contagious Disease Act was passed in 1864.

Osaka City University